バカとエクソシストと召喚獣《イノセンス》

きこりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとエクソシストと召喚獣（イノセンス）

【Ｎコード】
Ｎ７６４９Ｚ

【作者名】
きこりん

【あらすじ】
―――「君たち、学校に行ってみないかい？丁度良いところがあるんだ」コムイの計らいで、初めて学校に通うことになったアレン、神田、ラビ、リナリー。しかし彼らが通う学校―文月学園―は、ちょっと変わった学校だった。　　バカテスの世界にＤグレティーンズが参戦！そしてコムイの計らい（策略）はこれだけではなかった！？ギャグコメディ風味、バカとエクソシストと召喚獣（イノセンス）！！

【第一話】不安な呼び出し～アレン・ウォーカー～（前書き）

にじファンへは初めての投稿＝３
はじめまして　きこりん　です。

今回はクロスオーバー作品、バカとエクソシストと召喚獣（イノセンス）を
のんびりですが進めて行こうと思います

拙い文ですが、よかったら読んで行ってください＞（＿　＿）＜

【第一話】不安な呼び出し～アレン・ウォーカー～

ある晴れ晴れとした夏の日の昼下がり
白髪の少年アレン・ウォーカーは、いつも一緒にいるティムキャンピーと共に室長室へ続く薄暗い廊下を歩いていた

…いかにも嫌そうに

それと言うのも今から２０分ほど前
食堂で山盛りの食事を目の前にして至福の時を過ごしていたアレンのもとに、任務ではない呼び出しが伝えられたことによるものだった。

―――「アレン、室長が呼んでいたぞ。食事が終わってからで良いから来いとさ。」
―――「任務じゃないんですか？」
―――「どうやら違うらしい。俺も詳しいこと聞いてないからなぁ」

リーバー班長から伝えられたそれは、アレンに苦い過去を思い出させる。
むろん、たびたび教団を壊滅させそうになる問題児（？）、コムイがらみの事件である。
伝えに来たリーバーも、眉を八の字にして「まったく室長は…」とため息をつきそうな雰囲気だった。

いや、言っていたかもしれない

そんな経緯で、しっかりと昼食を食べ終えたアレンは室長室へ向かっていた。
重そうな、しかしいつもあけ慣れている室長室の扉の前に立ち「いや、待てよ」と考えなおす。

ここまでマイナスなことばかり考えてきたが、曲りなりにもコムイはここ黒の教団をまとめる人間（のはず）だ。もしかしたらこの呼び出しも、僕とリーバー班長の予想に反して、何か（危険なことじゃない）重要なことかもしれない。

そう思い、「大丈夫だよね」と頭上で羽ばたくティムキャンピーに声をかけたアレンは
室長室の扉をゆっくりと押し開けた。

【第一話】不安な呼び出し～アレン・ウォーカー～（後書き）

きこりん「お初にお目にかかります、きこりんです」

アレン「バカとエクソシストと召喚獣（イノセンス）、始まりましたね」

きこりん「長くて言いづらいから『バカエク』でいいよ」

アレン「なんだかその響き、府に落ちないのですが…まあいいや。」

きこりん（良いんだ…＾＾；）

アレン「ところで、なんで僕が後書きにまで出てるんです？」

きこりん「それはね…楽しそうだから」

アレン「正直に言ってください。どなたかを真似てるでしょう？」

きこりん「う…だってリスペクトしてる色んな方々の小説見てて、
　　やりたくなったんだよぉ」

アレン「イミテート」

きこりん「いえ、リスペクトです。」

アレン「まぁ、いいです。そういうことにしておきましょう」

きこりん「さすがアレンさん。お心が広い」

アレン「紳士ですから」

きこりん（自分で言うか…）

アレン「言わせてるのはあなたでしょう？」

きこりん「？ごめんなさい」

アレン「ということで、こんなgdgdな作者への質問、意見等がありましたら」

アレン・きこりん「「お待ちしております！！」」

きこりん（なんかそれとなくぐさっときたが…？）

【第二話】不安な呼び出し～神田ユウ・ラビ～（前書き）

第二話は神田視点で、お呼び出しのシーンです

ちなみに作者はＤグレもバカテスも
原作が手元にありませｎ（殴
そんな中で進めているので原作丸無視や
捏造どころの話じゃなくなりそうです；；

…受験終わったら揃えようかな

【第二話】不安な呼び出し～神田ユウ・ラビ～

いつものように教団の敷地内にある森で六幻をふっていた神田ユウのゴーレムに通信が入った。

『神田くーん、都合がいい時でいいから僕のとこまで来てくれるかな？』

「何の用だ？」

キッとゴーレムを睨み付け、声の主であるコムイに問う。

任務ならば任務だと、コムイは言うはずだ。

任務以外の事で鍛練を遮られた恨みのようなものが、神田の、ゴーレムの向こうにいるであろうコムイを睨み付けるまなざしに含まれていた。

『来てくれてから話すよ』

それだけ言うと、一方的に通信は切られた

しばらくそのまま、神田の目の高さにいるゴーレムを睨み付けていたが、

通信のせいで集中力が切れたのだろう。

ちっ、と舌打ちをしてから六幻を鞘におさめた神田は高く結いあげてある彼の長い髪をなびかせて
教団の建物の中へ入っていった。

――――――

「お、ユウもコムイに呼ばれたんさ？」

神田が教団の廊下を室長室に向かって歩いていると、ふいに背後から声をかけられた。

「俺のファーストネームを口にするんじゃねぇ」

ギッと神田が睨みつけた先にいたのは、赤毛で、右目に眼帯をしているラビだった。
「おぉ、こわ。」と、肩をすくめてさらりと神田の視線を受け流したラビは言葉を続ける。

「ところで、なんで呼ばれたか聞いてるさ？」

「知らん」

「やっぱりかー」

頭の後ろで手を組み、先に歩き出した神田の横を歩くラビ。
神田もあきらめたようにそのままラビと共に室長室に向かった。

【第二話】不安な呼び出し～神田ユウ・ラビ～（後書き）

きこりん「第二話です～なんとか書きました」
ラビ「でもまだ俺ら教団にいるんさね？」
きこりん「…いましばらくお待ちください」
神田「おい、テメェ勉強はどうした」
きこりん「Σギクッ…だ、第一関門（の試験）はとりあえず終わったんだよ？」
ラビ「でも次の試験まであと２０日さ」
きこりん「うぅ…ゴメンナサイ」
神田「まったく、我慢を知らねえのか？」
きこりん「お預けというものが苦手なのです…ほんとに」
ラビ・神田「「はぁ…」」
きこりん「そんな二人してため息つかなくてもぉ…ただ、今頭の中にある話は出し切りたいんだよぉ」
神田「あきらｍ「無理です（きこりん）」
ラビ「早っ！？」

きこりん「…こんなきこりんですが質問、意見などありましたら喜んで受け付けますので」
ラビ・神田「「これからもバカとエクソシストと召喚獣（イノセンス）をよろしく」
「さ」「頼む」
きこりん「あ、長いから『バカエク』でも…い〝っ！？神田さん、そんなに睨まないでください（泣」
ラビ「響きがちょっとなぁ…」

【第三話】不安な呼び出し～リナリー・リー～（前書き）

実は…っていう暴露話は後書きにしまして…

今回はリナリー視点で、コムイさんに呼び出されます

【第三話】不安な呼び出し～リナリー・リー～

陽射しのまぶしい夏のある日
任務から帰ったショートヘアの美少女リナリー・リーは、教団の室長でもある彼女の兄のもとへ向かっていた。もちろん任務の報告のために。

「ただいま、兄さん」

「おっかえり～。リナリー、怪我はなかったかい？？」

室長室の扉をあけると、両手を広げた兄、コムイ・リーが満面の笑みで出迎えてくれた。
その兄と言うのもシスコンの中のシスコン。この文章の中で表現しきれないのが申し訳ない。

「大丈夫よ」と微笑みかけ任務の報告をする。今回はイノセンスは無い、いわゆる『ハズレ』の任務だったが。

リナリーが一通り報告を終えると、コムイは「そうだ！」と何かを思い出したようにリナリーを見つめていた瞳をいっそう輝かせる。

「この後また話があるから、ここに来てくれるかな？」

…兄さんはちゃんと報告を聞いていたのかしら。

キラキラと自分を見つめている兄の様子に、そんな一抹の不安を覚えながら「分かったわ」とリナリーは部屋を後にした。

――――

任務の汗を流し終え再び室長室へ向かうと、兄（コムイ）の姿が見えない代わりに
ソファーにはすでにラビと神田が座っていた。

「あら、二人とも兄さんに呼ばれたの？」

「あぁ。ったくあいつは自分から呼んどいてどこほっつき歩いてんだ」

「きっと、またリーバー班長にでも追っかけられてるさ。リナリーは任務帰りさ？」

「えぇ。さっき帰ってきたの」

不機嫌そうな声色の神田と、おかえり、とリナリーに笑顔で声をかけるラビ。
神田は相変わらず腕を組んで座ったまま、扉の前にいるリナリーに顔は向けない。だが、その背中はおかえりと言っているように見え、リナリーはただいま、と微笑む。
ラビがポンポンと自身の隣のスペースを示すので、それに従ってソ

ファーに腰を下ろすとそれとほぼ同時にまた、しかし遠慮がちに室長室の扉が開かれた。

「失礼します…ってあれ、コムイさんは？」

ひょこっと顔をのぞかせたのは、白髪の少年、アレン・ウォーカーだった。
まだ来てないさ、というラビの横で、「ちっ、モヤシもか…」とつぶやく神田の声をアレンが聞き逃すはずもなく

「なんだ、神田もでしたか」

と、今にも（恒例の）小競り合いが始まろうとしていた。だがそれは待ち人の登場によって幸運にも（？）遮られる

「みんなお待たせ～。さぁさぁ、アレン君も座って」

ヨッシーのマグカップを持って笑顔で現れたコムイ。
しかしその後ろで書類を持たされて（おそらくコムイのわがままに付き合わされたのであろう）疲れた面持ちのリーバー班長を、そこにいた（コムイ以外の）全員が気の毒に思ったのは言うまでもない。

【第三話】不安な呼び出し～リナリー・リー～（後書き）

リナリー「やっと登場出来たわ。ねぇ、前置きの部分長くない？」
きこりん「そうなんですよ。本来ならすぐにでもバカテスの世界に飛ばすべき
　なのですが…どーしてもDグレの世界が広がってきて」
リナリー「で、短いながらもキャラごとに話を分けちゃったと」
きこりん「お察しの通りで…でもやっとみんな揃いました！」
神田「おい、前書きで述べた『実は…』って何だ？」
きこりん「そうだった（・・；）それなんですがね」
ラビ「リナリーをメンバーに入れるか迷ったって話さ？」
きこりん・リナリー「「！！？？どこからその話を」ねぇ、それって本当なの？」
アレン「二人とも台詞がかぶってますよ」
ラビ「コムイから『僕のリナリーをメンバーに入れないなんてひどいっ』
　って愚痴られたさ（苦笑）」
きこりん「それ言われたんですよ、うちの中にいるコムイさんに…」

アレン「そういえばここ、もはやネタばれしてません？」
きこりん「…あらすじでばらしてる部分だから（まだ）大丈夫！＾＾；」
リナリー「こんなおおざっぱな作者だけど、質問意見は喜んで対応するらしいわ」
ティーンズ「「「「バカとエクソシストと召喚獣（イノセンス）をよろしく」ね」さ」頼む」
きこりん（私の中でのティーンズって…？）

【第四話】コムイの計らい（前書き）

やっとだ！

とうとう呼び出しの正体が分かります。長らくお待たせいたしました（と言っても同日ＵＰだけど…）

そして今回も暴露（？）裏話を…

【第四話】コムイの計らい

「君たち、学校に行ってみないかい？」

にこにこと上機嫌のコムイが椅子に座るなり言った言葉は、エクソシストとして日々ＡＫＵＭＡと戦っている彼らにとって、一瞬だが、理解しがたいものだった。

「学校、ですか？」

沈黙を破ったのはアレンだった。それに続いてラビやリナリーも疑問を飛ばす。

「コムイ、いきなりどうしたんさ？」

「そうよ。それに私たちにそんな暇は無いんじゃない？」

神田に至っては腕を組んだまま「何を企んでやがる」と言わんばかりに、コムイを睨みつけていた。
そんな彼らにコムイは言葉を付け加える。

「もちろん任務がある時は任務に行ってもらうよ。けどみんな、学校に興味はない？」

全員がうっ…と言葉に詰まる。

エクソシストとして幼いころから教団にいた神田、リナリーに加え、ブックマンＪｒ．として各地をまわってきたラビ、それに実の親に捨てられてから、養父と無鉄砲な元帥により育てられたアレン。彼らは皆、学校と言うところに行ったことはなかった。
エクソシストとして、ＡＫＵＭＡを救済するために今までを生きてきたと言っても過言ではない彼らだからこそ、学校と言う平和に思える世界に興味はあったのだ。

「僕はそんなみんなに、学校と言うところを経験してほしかったんだ」

もちろんいい意味でね。と、それぞれの心を見透かしたように、コムイはやさしく言う。

「それに、丁度良い学校を見つけたんだ。リーバー君、みんなに資料を渡してくれるかな」

そこでやっと、ずっと立っていたリーバー班長がはっとしたように動く。
…もしかして立ったまま寝てたのか？なんて疑問はとりあえず置いておくとして、全員が渡された資料に目を通す。

「ふみづき学園？」

「日本か？」

ローマ字でふられた読み仮名に、神田が反応する

「そう。と言ってもそこは並行世界（パラレルワールド）の日本なんだ。そしてその学校は、他とちょっと変わってる。そこが君たちに丁度良いんだけどね」

「どう変わってるの？」とリナリーが聞くと、「よくぞ聞いてくれました！」とコムイが立ち上がる。
コムイの話によると、その学校では個々人のテストの点数によって試召戦争というものが行われているらしい。結局戦うのか、と一同はこっそりとため息をつく。しかし戦うのは本人ではなく、召喚獣という自分の分身だという話だ。

「でもちょっと待ってください。ラビはまだしも、僕たち勉強すらしたことないですよ？」

「だから学校に行くんだよ」

あっけらかんと言ってのけるコムイに、それもそうかとうなずく四人。

「とりあえず向こうの学園長に話はつけてあるから。はい、これ」

そう言って渡されたのは男子は青、女子は赤を基調とした文月学園の制服だった。

【第四話】コムイの計らい（後書き）

きこりん「ふー、やっと教団を出ますよ」
アレン「まさにgd gdと進んで行きますね。読んでくださった方、お疲れ様です」
きこりん「そして書いていて気付いたことがあるので、
　　リナリーの時の話をちょいと手直ししてきます＝3」
神田「ちょっと待て」（ガシッ）
きこりん「はい？」
リナリー「前書きに書いた暴露裏話がまだよ？」
きこりん「あぁ！」
ティーンズ（（（（忘れてたのか））））
きこりん「それなんですがね、時系列について悩んでたんですよ。
　　出来ればDグレの設定をずらしたくないけど、アレンのイノセンスを
　　クラウン・クラウンにするとリンクをどうするか迷うし…」
ラビ「で、結局のところ？」
きこりん「方舟を出さないとバカテスの世界に行けないので、
　　リナリーの髪形を直してきますっ＝3」
アレン「…走って行っちゃいましたね」
ラビ「あれ、書置きがあるさ…『リンクを出すかはおいおい考えます』」
リナリー「相変わらずおおざっぱね」
神田「はぁ…本当に進むのかこの話」

…頑張って進めます。ここからはのんびりになると思いますが。
意見質問ありましたら喜んで受け付けますので、これからもよろし

くお願いします！

【第五話】転校生（前書き）

とうとうバカテスの世界に入ります！

【第五話】転校生

ある晴れた夏の日の朝の事
文月学園二年Ｆクラスに、ある一報が届いた

「…転校生がこのクラスに入るという情報を得た」

ムッツリーニこと土屋康太はスタタタ、と小走りに教室に入るや否や、そこにいた観察処分者である吉井明久とクラス代表の坂本雄二に耳打ちした。

「この中途半端な時期に転校生だと？」

雄二の言葉に、冷房のない教室でうだうだしていたＦクラス全員が敏感にも、その場で耳をそばだてる。

「どんな人かわかる、ムッツリーニ？」

「男が三人…」

男かよ。なーんだ。という空気が教室に広がる。だが次の「…と美女が一人」という言葉で、そこは一気に色めき立った。

――――――

「なんだかわくわくしますね」

「どんなところかしら」

ここでしばらく待つように、と通された部屋に四人はいた。たくさんの机や椅子そして数えきれない量の本が並ぶ様子からして、そこは図書室なのだろう。木漏れ日が差し込みむせかえるような紙の匂いに、それぞれがブックマンの部屋や室長室を思い出しながらそわそわと呼ばれるのを待っていた。

コムイの勧める、と言うところに不安はあったものの、いざ学校に足を踏み入れるとやはり期待や興奮があるもの。それは言葉に出したアレンやリナリーに限った事ではなかった。

「しっかし、編入早々試験を受けさせられるとは思わなかったさ」

少し離れたところで本をめくっていたラビが苦笑いで言う。彼らは先程まで、召喚獣の強さのもととなる点数を確保するためにテストを受けていた。もちろんそれまでテストというものを受けたことが無い彼らにとって、それも貴重な体験の一つとなったのだが。

「そうですね。数学や英語は何とか分かったんですが、国語はちょっと…」

「神田なら読めたんじゃない？」

「いや、俺も日本語を学んだことはない」

日本の学校であるため問題もほぼ日本語。それが彼らにとって少なからず壁となっていたようだ。

すると突然、図書室の扉が開かれた。そこに立っていたのは、先程

の試験で監督をしていた西村宗一という、いかにも体育会系な体つきの先生だった。

「編入早々の試験、ご苦労だった。これから教室へ案内するからついてこい」

そして四人はFクラス（最下位クラス）へ、編入した。

――――――

その頃どこから漏れたのか、あらゆるクラスの男子生徒が授業中にも関わらず、しきりに廊下を気にしていた。むろん、『美少女』を見るためである。その様子を呆れたまなざしで見ていた女子生徒だったが転校生が通りかかると、そのまなざしを好奇の色に輝かせた。

「…なんだか随分見られてません？」

「そりゃ、どう見ても日本人の顔つきじゃないからなぁ」

珍しいんさ、とあくまで軽く受け流しながらも目の合った女子に手を振るラビ。その様子に頬を染めた生徒の数知れず。神田は馬鹿らしいとため息をつき、さっさと歩いて行ってしまう。

物陰からそれをカメラに収めている人がいるなんて誰も気づかなかった。

――――――

「……最新情報」

ムッツリーニが息を切らすことなく、しかしすばやく教室に入ってくる。教師不在のため自習となっていたＦクラスは、ムッツリーニの言葉の続きを聞こうと一瞬にして静まり返る。

「一人は日本人、美少女はアジア系…おそらく中国人、他の二人は良く分からないが西洋系の顔立ちだった。」

そう言って先程撮ってきた写真をピッと目の前に掲げる……随分とローアングルのものが多い

「…一枚５００円」

教室の隅で男だけの、静かながらも熱い競(せ)りが始まった。

「さすがムッツリーニ、情報が早いな」

「ドイツ出身はいるかしら」

雄二がその輪から離れたところで感心していると、ドイツからの帰国子女である島田美波が尋ねてくる。彼女もまた、日本語が読めずに試験で苦労していた一人である。

そこに、立てつけの悪い扉が音を立てて開いたかと思うと、鉄人こと西村先生が噂の転校生をつれて教室へと入ってきた。

【第五話】転校生（後書き）

きこりん「いつもより長めでお送りしました！そして場面展開の多さ、

読みづらくて申し訳ありません＜＞；」

雄二「とうとう俺らも登場だな。まだ転校生とやらに会ってはいないが」

きこりん「それは次回のお楽しみで」

…ここで参考までに。エクソシストはＤグレでは英語で会話している、という設定ですがここでは物語の都合上、バカテスキャラとも日本語で会話が成立しています。理由づけは何とか考えますが、無理やり感あふれる後付けになると思うのでご了承ください＞（＿）＜

それでは、意見質問ありましたら喜んで受け付けますので

これからもよろしくお願いします！

【第六話】自己紹介（前書き）

どんなタイトルよ＾＾；
むしろそのままかな、内容が…。

さてさて、バカテスメンバーとDグレメンバーの初対面です！

【第六話】自己紹介

いかにも立てつけの悪そうな扉を（こじ）開けた先に四人が見たものは、はがれかけた畳の上に綿の抜けた座布団、そして使い古された段ボール。

（なぁ、学校ってこういうとこなんさ？）

（…さぁ）

思わず互いに目で語る。そんな自分たちを好奇の目で見つめてくる同じ制服を着ている生徒たちは皆、正座やあぐらなどと自由きままに座っているようだった。それでもやはり、教室の様子に目が行ってしまう。綿ぼこりの舞いそうな教室の隅、短くなったチョーク、薄暗い蛍光灯。

笑顔、笑顔などと思うがたちまち顔が引きつるのが分かった。

「こんな時期だが、転校生を紹介する。日本に不慣れなようだから皆、仲良くするように」

西村先生が声を張り上げると、窓ガラスが微かに共振するのが分かった。ここのどこが丁度いいんだ、なんて心の中でコムイに不満を言ってみても始まらない。せっかく学校に通えたのだから…とそれぞれが意を決したように軽く、深呼吸した。

「初めまして、アレン・ウォーカーです。よろしくお願いします」

「ハジメマシテ、ラビっす」

「リナリー・リーです。よろしくね」

「…神田だ」

任務などで世界を渡り歩いてきた彼らにとって、自己紹介などの初対面でのスキンシップは朝飯前（無愛想を貫き通す神田を除く）。それぞれが笑顔で名前を述べ終わると、一番後ろの席に座るように指示される。

キーン、コーン…

と、そこで授業終了の鐘が鳴り響いた。「きりーつ、礼」と赤い髪を上にあげた男子生徒が気の抜けたような声で号令をかける。西村先生はそれぞれの肩を軽くたたき「次は授業でな」と教室を去って行った。それとなく緊張がとれ四人はため息をつきかけてあたりの様子に再び身を強張らせる。気づくとFクラスの生徒に囲まれていた。

「どこ出身？」「その傷、どうしたの」「その眼帯かっこいいね！」「今までどこにいたの？」「リナリーさん、彼氏はいますか！？」「神田ってホントに男？」

それぞれが一度にてんでばらばらな質問を投げかけてくる。職業上、何とか聞き取れたラビが不穏な気配を察して神田を見やると、最後の質問だけは聞こえたのか青筋を立てて怒りを露わにしていた。

「みんな落ち着くさ！順番に答えるから、それでいい？」

ラビが神田がキレる前に何とかまとめると、Fクラス一同はうなず

いた。何気に統率力は良いのか、なんて思わず感心してしまう。「その前に」と、アレンが口をはさんだ。

「皆さんの自己紹介がまだなので、うかがっても良いですか？」

――――――

初めに名乗ったのはクラス代表、坂本雄二。先程号令をかけていた生徒だ。そして次に名乗った吉井明久は、アレンの傷に随分と興味を示していた。

「どうしたの、その傷？」と目を輝かせて聞く明久に、「呪い、です」と手袋をはめた左手でペンタクル（きず）に触れながらアレンは少しさみしそうに答える。

「あ、ごめん…」

「いえ、気にしないでください」

そういえばこのクラスには僕の傷を白い目で見る人はいなかったな、とアレンは思う。距離を置かれなかったようで少し、嬉しかった。次に名乗ったのは木下秀吉。名前からして男なのだが、どうやら女の子として間違われやすいらしい。「そういえば」とラビが思い出したように言う。

「随分と豪華なクラスに、髪型違ったけどおんなじ顔の女の子いたさ」

「わたしの双子の姉じゃ。Ａクラスにおるでの」

なるほど、女子と間違えられるわけだ。姉との違いはヘアピンの位

置らしい。次は、土屋宏太。寡黙なため明久が付け加えたところによると、ムッツリーニと呼ばれているらしい。だがその由来まではまだ分からなかった。そして、数少ない女子は姫路瑞希と島田美波。瑞希は腰のあたりまでのふわふわとした髪にうさぎのピン止めをとめてかわいらしい、という言葉のよく似合う女子だ。一方で美波は黄色いリボンで高めにポニーテールにしており、瑞希とは対照的に活発な印象を持った。

キーン、コーン…

と、ここで他多数の自己紹介を残し次の授業の予鈴が鳴った。雄二によると次は体育らしい。

「リナリーちゃん、女子更衣室まで案内します」

「ありがとう、姫路さん」

「じゃ、ウチらは先行ってるから男子も早く来なさいよ」

そう言って、わいわいと三人は教室を出て行った。
もちろん残されたのは男子ばかり。いきなり華のなくなった教室は、初めよりもなんだか味気なく思える。

「さーて、俺らも着替えるか」と、伸びをしながら雄二が全員に声をかけた。

【第六話】自己紹介（後書き）

雄二「おいおい、自己紹介で一ページかよ」
明久「僕ほとんどしゃべってないよ」
きこりん「申し訳ないです…おおざっぱに書けないという性格がまざまざと出てしまった；；」

質問、意見ありましたら喜んで受け付けますので。
これからも『バカエク』をよろしくお願いします＞（＿＿）＜
きこりん（もう、この通り名で浸透させようかな…）

【第七話】身体能力（前書き）

今回はほとんどが雄二視点のようなところです

あぁ、ネタが無い；；

【第七話】身体能力

体育の授業は晴天下のグラウンドで行われた。

生徒たちの数メートル先にはセーフティマットと横に渡されたバー、高跳びの道具があった。一人ずつ名乗りを上げて跳びに行くその高さは、一メートルと言ったところだろうか。あるものはバーを落とし、あるものはすれすれで飛び越え、そしてあるものは――――アレン・ウォーカーはバーの上を３０センチ（いや、それ以上だろうか）余裕を持って飛び越えた。それも、きれいな弧を描いた背面跳びで。

「アレンすげぇ」「まだ上に行けるんじゃね？」

などと、感嘆の声があたりから漏れる。アレンの次は神田だった。タタタ、と助走を付けて

「マジかよ…」

アレンより高く飛んだ。彼の低めに結わえた長い髪がきれいに流れる。アレンとの身長差のせいもあるのだろうが、それにしては高校生離れした身体能力だ。

と、不意にカメラのシャッター音が聞こえ振り向くと、土屋宏太（ムッツリーニ）が女子の方を向いてカメラを構えていた。その時点でもはやいつもの盗撮ではなくなっているが。

「おいムッツリーニ、体育の時間くらいはやめておけ」

「（ぶんぶんぶん）……あれを撮らないでどうする」

激しく首を振るムッツリーニが「あれ」と言った方を見ると丁度、リナリーが飛ぶところだった。Ｆクラス男子がバッと一斉にそちらを見る。バーの高さは男子と同じ１メートルくらいだ。しかしリナシーはそれを軽々と、きれいに飛び越えた…神田と同じくらいの高さで。

「すごいリナリー！」

「かっこいいです！」

女子の方からも黄色い声が飛ぶ。リナリーがえへへ、と照れたように笑い、三人でまた続きを始める。

雄二の足元では、指がつるんじゃないかと言うほどムッツリーニがカメラのシャッターを切っていた。

「さすがリナリーですね」

「俺も負けてらんないさ」

後ろからアレンとラビのそんな会話が聞こえる。そして「ラビいっきまーす」の声につられてそっちを見ると、ラビがベリーロールを決めたところだった。再び歓声が上がる。

「みんなすごいなぁ。よし、僕も！」

そう言って駆け出して行った明久は歩数が合わなかったのか、飛び越えることなく見事にバーにぶつかった。あちゃー、という声や、頭を抱える雄二に秀吉。「あれー、おっかしいなぁ」と立ち上がり戻ってくる明久を眺めながら、アレンとラビは話していた。

「なんか、楽しいですね。似たような年の仲間とこうやって笑いあえるのも」

視線の先では「俺が見本を見せてやる」と雄二が駆けだし、その後ろ姿に明久が「霧島さんにかっこいいとこ見せるんだね！」と声をかけていた。

「そうさね。ユウもそう思うっしょ」

「…まあ、な」

まんざらでもない、という神田の雰囲気にラビは満足しながら、雄二がずっこけて後に明久につかみかかるのを楽しそうに眺めていた。

【第七話】身体能力（後書き）

雄二「どーしてそこで翔子の名前が出る！？」
明久「え、だって霧島さんがそこに…」
翔子「…雄二、見に来た」
雄二「おまえ、授業は！？」
翔子「…雄二の方が大事（ぽっ」
雄二「…（ぱくぱくと何か言いたそうにしているが、何も言えない）」
明久「あ…僕お邪魔そうだから、向こう行ってるね」
雄二「（がしっ）行くな、頼むから」

きこりん「え、と、今回はちょっと短めでしたね。
体育のシーン、入れるか迷ったのですが（そして翔子を出すか
迷ったのですが＾＾；）今後の発展的に入れたほうがよいかと思って
入れてみました」
アレン「一回操作ミスで第七話、消しちゃったらしいですね」
きこりん「あれはショックだった；；ちなみに話の流れは上のと
ちょっと違ったんですよ。でも、あーもういいやってなっちゃって」
ラビ「ほんとに行き当たりばったりさね。それに今回最後の方の俺ら、
ちょっとシリアスっぽくね？（確かあらすじにギャグコメディ風味って
書いてあった気が）」

きこりん「それはうちも書いてて思った。だからどうにかなるかと思って

神田に話を振ったんですよ。」

神田「無理やり感満載だったがな（そしてどうにかなったとも思えない）」

はい、私の頭の中は常に無理やりで話が進みます。神田にしゃべらせたいけど、難しい；；

質問意見、喜んで受け付けます！これからも『バカエク』をよろしくお願いします＞（＿＿）＜

【第八話】新たな転校生（前書き）

年末ですね…。きこりんは今朝１１時ごろに今日が１２月３０日だと気付きました。
そして２０１１年があと２日だと（おい
そんな、日付感覚のほとんどない　きこりん　です。

今回はとうとうあいつの登場です…

【第八話】新たな転校生

「ただいまぁ～…って、リンク！？」

アレンたちが教団に戻ると、方舟の出入り口のすぐ外に腕を組んだリンクと苦笑いのコムイが立っていた。

「ウォーカー、あなたが学校に行くという話を聞いていませんでしたが？」

「ごめん、僕から伝えるの忘れてて～」

後ろでコムイが頭をかきながら謝る。「はぁ…」とリンクがため息をつく。アレンもアレンでリンクに学校の事を言っていなかったと思いだす。

「おいモヤシ、邪魔だ」

後ろからキレ気味の神田が言った。アレンはリンクとコムイに気を取られ、そこで立ち止まっていたのだ。

「はいはい、すいませんね」

全く神田はこういうときも突っかかるな、と思いながらアレンは自分の部屋へと歩きだす。その後ろを監視役のリンクがついていく。

「それでウォーカー、明日から私も付いていきますので」

「はーい……え？」

生返事をしてからリンクの言葉の意味に気づき、振り返る。

「もちろん監視のためです」

「いや、ちょっと待って。ついてくるって学校に！？」

「それ以外にどこがあるんですか？あなたの監視が私の仕事です」

「…はあぁぁ～」

アレンは大きくため息をつく。学校にいるときは窮屈な監視のことをまったく忘れていた。そう、忘れていられたのに…

「不本意ですが、室長からこれを渡されました」

そう言って手に持っていた紙袋をアレンに見せる。その中には今アレンが着ているのと同じ、文月学園の制服が入っていた。

――――――

翌日、文月学園二年Ｆクラスに新たな転校生が来た。

「ホクロ二つも来ることになるとはびっくりさ」

「ホクっ！？…ウォーカーの監視のためです」

「全く、ここまで付いてこなくても良いのに…」

「仕事ですから」

学生の割にはピシっと伸びた背すじにFクラスのほとんどは圧倒されていた。なんだかお堅い人だ、という認識がついたらしい。しかしラビ、アレン、リンクの会話の内容を理解できた生徒はいなかった。

―――――

リンクも文月学園に通うようになって数日後のこと。

「またババアが何かやらかしてくれたようだが、今回ばかりは楽しめそうだ」

学園長に呼ばれて席を立っていたクラス代表、坂本雄二がそう言って教室に入ってくる。

「どうしたのじゃ坂本？」

「もしかして召喚獣がらみ？」

「ああ。だがババア曰く『転校生のため』だとよ」

雄二の言うババアとはこの学園の学園長、藤堂カヲルの事である。だが召喚獣がらみのドタバタによる被害を（特に頻繁に）受けている雄二と明久からは「ババア」や「ババア長」と呼ばれてしまっている。

その呼び方に、理由を知らないリンクは眉間にしわを寄せる。だが

口をはさむことはしないらしい。そのまま黙って座っていた。

「僕たちのため？」

アレンが雄二に尋ねる。

「この学校には試験召喚獣を召喚して、テストの点数をもとに試召戦争というものを行っている。だが来たばかりのアレンたちはまだ召喚をしたことが無い。だから召喚獣の操作に慣れるために一度召喚してみるかってことらしい」

あぁ、そういえば。とそこにいた全員が思う。そしてまだ一度も召喚したことが無い彼ら自身だけでなく、Ｆクラス全員が転校生たちの召喚獣に興味を持っていた。

「ねぇねぇ、早速召喚してみようよ！」

明久がわくわくと身を乗り出す。雄二はそうだな、と手に持っていた腕輪を明久に渡す。

「え、ぼく？」

「あの時（宝探し）のよりは改良されたらしい。ま、どちらにせよおまえにしか使えないんだと」

明久はしばらくその腕輪を見つめてから、意を決したように腕にはめる。

「じゃあいくよ。『アウェイクン（起動）』！」

明久を中心にフィールドが張られる。それすらも初めて見たアレン、ラビ、リナリー、そして神田とリンクまでもが目を丸くして驚きを隠せないでいた。

「基本的に召喚獣は教師の張るフィールド内でしか召喚できない。これはその代用だ」

雄二が説明を加える。そのわきで秀吉が「今回は爆発しないのじゃな…」と明久の腕輪を眺めていた。

「習うより慣れろ、だ。こうやって召喚する。試験召喚獣召喚『サモン』！」

雄二が叫ぶと足元に幾何学模様の魔法陣らしきものが現れて、その中心から雄二を小さくしたような、しかし耳のとがった召喚獣が出てきた。雄二をデフォルメしたそれは白い長ランにメリケンサックという出で立ちだ。

「さ、やってみろ」

雄二に促され、「なら俺がやってみるさ」とラビが立ち上がる。

「試験召喚獣召喚『サモン』！」

すると雄二の時のような幾何学模様が現れ、中から団服を着た小さいラビがぴょん、と出てきた。

「団服！？もしかして…」

そうしてアレン、リナリー、神田も「『サモン』！」と唱える。そ

れぞれに幾何学模様が現れ…

「…団服だな」

四人の召喚獣は全て、教団の団服を着ていた。召喚者の驚きなど知ったことか、と高い声を上げながら四人と雄二の召喚獣は戯れていた。

「か…かわいい！」

そう言って頬を染めるリナリー。確かにそうですね、とアレンもうなずく。そこで姫路が「あれ？」とつぶやく。

「どうして皆さんの召喚獣は武器を持っていないのですか？」

「あ、ほんとだ。確かにおかしいわね」

美波も首をかしげる。そこでようやくリンクが口を開く。

「ウォーカー、『発動』してみたらどうですか？」

「「「『発動』？」」」

アレン達が「そうか！」と頷いている一方、Fクラス一同はまた話が飲み込めないという顔だった。

「おいリンク、どういうことだ？」

「こちらの話ですので、お気になさらず」

雄二の質問にも動じずに答えるリンク。雄二はその様子に、今はまだこれ以上聞かない方がいいことを悟った。

【第八話】新たな転校生（後書き）

きこりん「言い忘れてた！私の中でのバカテスはアニメ版がメインですので、
　　腕輪の話などは原作からずれております。ご了承ください」
雄二「そんなことより、リンクの言ってた『発動』って何だ？
　　俺らの『サモン』と何が違う？」
きこりん「それは次回のお楽しみ」
雄二「前と同じパターンだな」
明久「それより、バカテスの主人公はぼくのはず…
　　どうして雄二ばかりしゃべってるの！？」
きこりん「…クラス代表だから？」
明久・雄二「「答えになってない」」
きこりん「う…ごめんなさい。ほんとは明久君をどうやって
　　しゃべらせるか分からないでいるんです；；」

ほんと、主人公が入れ換わりそう…。
今回は切るタイミングが分からず長めになってしまいました。次はこの場面の続きになります。

【第九話】召喚獣とイノセンス（前書き）

はい、長くなってしまった前回の続きです。
そういえばリンクだけまだ召喚してない…

【第九話】召喚獣とイノセンス

「わかりました、やってみますね」

そう言ってアレンは戯れてる五匹の中にいる、アレンによく似た召喚獣を呼んで慣れたように唱える。

「『発動』」

すると召喚獣の足元の幾何学模様がイノセンスのような緑色の光を放つ。光がおさまったかと思うとそこには仮面のついた白いマントを羽織って、左腕が黒く光る爪（エッジ）へと変化したアレンの召喚獣がいた。

「やはり、イノセンスが召喚獣の武器でしたか」

それを見たリンクがまわりに聞こえない声でつぶやく。また雄二あたりにイノセンスについて尋ねられるのが面倒だとでも思ったのだろう。それからしばらくは他の三人が発動するのを黙って見ていた。

「へぇ…学園長も新しい事したんだね」

と、足元の幾何学模様が緑に光るアレンたちの召喚獣を見ながら、明久は感心したように言った。アレンの召喚獣以外は白いマントは無いが、黒い団服であることは変わらない。しかしそれぞれ、ラビは槌（ハンマー）、リナリーは黒い靴（ダークブーツ）、神田は日本刀（六幻）を装備していた。

「さて、残るはリンクだけだな」

雄二に声をかけられ「そうですね」とリンクはスッと立ち上がる。

「試験召喚獣召喚『サモン』」

落ち着いた声で唱える。幾何学模様の中から現れたのは、きっちりとした中央庁の監査官の制服を着た小さなリンクだった。

「リンクも変わらないんですね」

アレンが屈んでまじまじとリンクの召喚獣を眺める。「あれ、リンクだけ服が黒くない」と明久がつぶやくが、そこでもやはり姫路は「リンクさんのも武器を持っていませんね？」と気付く。

「きっと私のはこういうことでしょう」

そう言ったかと思うと、リンクの召喚獣の袖口からシュッと小さなナイフが飛び出た。「うわっ」と、近づいていたアレンが驚いて後ろに飛び退く。ナイフをしまった召喚獣に歩み寄り「上出来です」とリンクは召喚獣の頭をなでた。

「…意外ですね。リンクが優しいなんて」

「悪いですか？」

アレンがぼそりと言うのにもすぐに返すリンク。意外に感じたのはアレンだけではなかったようで、少なからずリンクに「お堅い人」の印象を持った生徒はアレンと同じように目を丸くしていた。だが、ラビやリナリーはアレンの世話を焼くリンクを教団でも見ていたせいかそれほど驚いた様子もなかった。

「アレン、意外なんさ？」

「リンクはいつもアレン君の世話を焼いているじゃない」

世話好きなんじゃない？と言われ、リンクは「仕事です」と否定する。そんなやり取りを見ていて、とうとう我慢できなくなった雄二は疑問をぶつけることにした。

「なあ、さっきからおまえらの話を聞いてると、いまいち腑に落ちないところがある。一体お前らはどんな所から来たんだ？」

「え、雄二どういうこと？」

観察処分者（キングオブバカ）の明久が、何を言っているのか分からないというように雄二に尋ねる。

「四人の身体能力もそうだ。俺らの年ごろにしては常人離れしたものだった」

それを聞いた五人は動けなくなった。エクソシストやイノセンス、黒の教団については元の世界同様、極力口外しないようにしてきた。しかし召喚獣とは言え、ここまでエクソシストの姿を晒してしまったからにはもう言い逃れはできないだろう。

誰もしゃべらない、緊張した空気を破ったのはアレンだった。いや、正確にはアレンの耳についた通信機だった。

『アレンくーん、聞こえる？』

「コムイさん！？」

もちろんコムイの声はアレン以外には聞こえない。リナリーが、コ

ムイからの通信と聞いてほっとしたように体の力を抜く。

『ごめんね、ちょっと話聞いてたんだ。彼らに話しても良いよ、教団の事とか』

「へ？」

「コムイ、なんだって？」

「…話しても良いそうです、教団の事」

「こちらが並行世界（パラレルワールド）だからか？」

『リンク君の言ったようなところだよ。とにかく、そんな状態じゃ肩身狭いでしょ？』

だから必要な分だけでも話しちゃって、打ち解けてきなよ。とコムイは告げる。

「わかりました、ありがとうございます」

安心したようにアレンはふぅ、と息を吐く。その耳元でコムイが『あと、お願いがあるんだ』とまじめな声になったので思わず姿勢をただす。が、次の言葉でアレンは大きくずっこけた。

『僕もリナリー（小さいリナリー）の召喚獣見たいから、写真よろしく！』

【第九話】召喚獣とイノセンス（後書き）

きこりん「どこで切るか迷って、結局コムイさんに締めてもらいました！」
美波「うちらどころかバカテスの登場人物は、ほとんどしゃべらないわね」
姫路「ところで召喚獣って写真に写ったかしら？」
きこりん「うーあー…細かいところは突っ込まないで；；；」

今回はリンクの描写に苦労しました…召喚獣も鴉の装束にしようかとも思ったり…でもハイスペックなリンクは装束姿じゃなかった（と思った）ので監査官の制服になりました。
ちなみに上で「細かいところは突っ込まないで」とか言ってますが、（小説に関する）皆さまからの質問意見は喜んで受け付けます

では、これからも『バカエク』をよろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7649z/

バカとエクソシストと召喚獣《イノセンス》

2011年12月30日22時53分発行